

第5節 宗教の実態と宗教意識についての覚書

はじめに

滋賀県の湖南・湖東地方は、京阪の大都市圏に接続し、気候風土的にも瀬戸内のといわれ生活様式も近畿型といわれる地域である。湖南地

方の一部は早くから都市化していたのに対し、湖東地方は、比較的開発がおくれていたが、この十数年間に、工業団地の形成、宅地造成、他府県からの転入者の増大、農業形態の変容が進

み、従来の静かな農村地帯から近郊農村的な都市的様相に変ぼうしつつある。従来の湖東地方は、近江八幡、日野、五箇荘のように近江商人のふるさとであり、「ジゲ」とか「ソウ」とよばれる村落の共同体的結合の強いところであり、また、先祖供養を大切にする仏教信仰地帯でもある。

さて、「中部広域」の各市町村の特色をスケッチしてみると、最大の都市は、近江八幡市である。伝統的に商人の町であり、八幡ガワラ・畳表などの若干の地場産業があるが、近年は京阪のベッド・タウンとしての宅地化で盛んである。大正期のボーリス氏の宣教活動もあって、県内でもキリスト教徒の多い地域でもある。八日市市も、市名が示すように、元来が商人の町である。その商圏は、奥深く伸びている。工業生産も盛んで、人口規模では近江八幡市の約半分であるが、事業所数や従業者数は八日市市の方が上まわっている。日野町は、八日市よりさらに奥の丘陵地帯の町である。かつて、日野商人と呼ばれた人たちの豪壮な白かべの家並が見られる。木材・酪農・製菓が伝統産業であるが、奥地の不利をはね返そうとして、日野工業団地が造成されている。永源寺町は、農村というより鈴鹿山系に直接した山村の風景を展開する。臨済禅の本山永源寺と紅葉の名所である。政所茶も知られているが、山林業がふるわないため、人口減に悩まされている。ついで、蒲生町は、農業地帯である。総人口に対する農家人口比は76.5%(昭和50年)と中部圏内で最高である。野菜と畜産といった農業の多角化が試みられている。竜王町は、町の中央を名神高速が走っている丘陵地帯であって、観光と工業化を目指している。安土町は、織田信長の安土城址で有名であるが、米作農業地帯である。宅地化と観光の町を目指しているが、あまりはかばかしくない。五箇荘町は、日野町と並んで、近江商人のふるさとである。金堂には、豪壮な邸宅が軒を連ね、最近その軒並が、国より文化保存地区に指定された。商人の同族関係、家族制度的感覚の濃厚なところである。能登川町は、東海道線の沿線に位置し、戦前からの工業地帯もあり、農業とともに商業活動も盛んな

ところである。近年、京阪や湖南地方のベッド・タウンという色彩も加味された。教育・文化・福祉施設への町の積極的な投資がみられる。かつては、水田米作地帯であったが、混住の様相が激しくなっている。

〔I〕 湖東地域の宗教の実態

「近江泥棒、伊勢乞食」という県民性をあらわす古い言葉があるが、近江泥棒とは、江州商人の商法を表現したものであろう。また、「江州商人の通ったところには草も生えぬ」ともいう。そうであれば、滋賀県の県民性は、江州商人の発生地である湖東地方が代表することになるだろうか。近江商人は江戸中期から活躍したが、実際は、行商から身をおこし、質素倹約・先祖崇教などの倫理性のある伝統をもっている。家族主義的な「のれん商法」であり、成功者は財力とともにその人格性が尊敬されるという風潮があった。こうしたエートスは、湖東地域には色濃く残っているようである。この地域の住民にとっては、今でも、他国に出て行って商店を出し雇人の二、三人でも持つようになることが、一種の理想像になっていると思われる。土に生きる筈の農民も、商売人のような感覚をもっている。要するに、金銭にこまかく、金銭感覚が鋭いようである。しかし、また、この地域の住民は、村落結合の強さを示す。それは、「おらが村」といった愛着とか、誇りとかというより、もっと歴史的に形成された制度的な感覚である。現在でも、一つの部落は、その成員の多くが通勤者として京阪に出ているような兼業形態であっても、一つの宇宙空間のような意味を持ち続けている。ときには、それは自治的な一致団結を示すこともあるが、隣家同志で敵対するといった競争原理も働いている。湖東の村落結合の強さと閉鎖性は、宮座の慣行が多く、多くの部落で残存していることも関係するであろうし、また、滋賀県が「日本のヘソ」と呼ばれるように、他国より人間が移動し通過していった通路のようなところであったことにも関係するのかもしれない。NHK世論調査研究所の「全国県民意識調査」の報告にも、この地域の住民のネガティブな性格が浮きぼりされている

る⁹⁾。NHK のアンケート調査によると、滋賀県では、「よそ者」というような言葉が、まだ生きてると答えた人が約半数あり、全国で2番目に多かったと報告されている。つまり、地縁の人間関係が深く、閉鎖的な土地柄なのである。しかも、この地縁的な人間関係も、「この近所の人たちは、張り合うことが多い」と答えた人が全国第4位の多さを示しているの、互助的な積極的なものというより、かなり息苦しいものであると推定される。「地元の行事や祭には積極的に参加したい」と答える人も多いが(第6位)、その反面、「昔からあるしきたりは尊重すべきだ」という意見が、全国のなかで滋賀県が一番低いということである。滋賀県の人たち(とくに湖東地方)は、はがんじがらめの地縁的・閉鎖的・因襲的ともいべき人間関係の中で息苦しくなり、そこから逃げ出したいと考えているようである。しかし、こうした現状批判的な地域住民の意識は、都市的・革新的な意識というよりも、古いしきたりにしばられていることの自己反撥的な回答であると、同調査では分析されている⁹⁾。さらに、同調査の結果では、「仏教を信仰している」と答えた人が40.8%もあり、全国平均の19.3%をはるかにしのいで、全国順位第3位であるとなっている。つまり、滋賀県は有数の仏教信仰県である。先述のように、地域生活の閉鎖性と古さにもかかわらず、滋賀県民の生活満足感はかなり高く全国第8位の順位にある。これは、一見すると、矛盾しているようであるが、滋賀県民の生活満足感には、かなり精神的な要素があり、同調査の報告でも、それが仏教(なかでも浄土真宗)信仰に結びついていることが指摘されている。以上大ざっぱに、「中部広域」の地域住民の性格をスケッチしてみたが、以上のことを要約すれば、①商業的感覚が鋭い。②村落の地縁的伝統が強い。③仏教信仰を基調とした精神性がみられるといったことになるうか。

さて、滋賀県は全国有数の仏教信仰県であるといわれるが、湖東地域はどのような宗教分布を示すかを次にみてみよう。宗教分布といっても、その成立発展段階からいって、3レベルに分けるのが適当である。

表3-110

中部広域市町村圏内の主要宗派寺院分布

	天台宗	真言宗	浄土宗	真宗系	禅系	日蓮系
近江八幡市	38	1	39	64	11	5
八日市市	4	10	26	10	12	1
安土町	13	0	5	8	3	0
蒲生町	3	0	18	11	7	1
日野町	3	1	15	60	20	1
竜王町	4	0	11	23	2	1
永源寺町	2	0	4	10	14	0
能登川町	3	0	1	39	9	0
五箇荘町	3	0	8	19	8	0
計	73	12	127	244	86	9

- (1)第一レベル 仏教各宗派(明治以前からの)
- (2)第二レベル 明治以降に成立発展したもの。天理教、金光教、キリスト教など。
- (3)第三レベル 戦後の新宗教、あるいは最近活動している新宗教。

まず、第一レベルの仏教寺院の分布をみると、表3-110のとおりである。全体からいって、真宗系寺院(本願寺派、大谷派、仏光寺派、木辺派)が最も多く、ついで、浄土宗・天台宗系(天台宗と天台真盛派)が多い。ことに、日野町と能登川町は、真宗系寺院の王国の感がある。日野町には「日野牧七ヶ寺」とよばれて、野洲の錦織寺、八日市爪生津の弘誓寺と並んで、近江における真宗発祥の地でもあった。ついで五箇荘町・近江八幡市・竜王町も、真宗系寺院の多い地域である。浄土宗の寺院が多い地域としては、他宗派を押えて圧倒的に多いのは八日市市であり、数からいえば近江八幡市である。蒲生町・日野町にも浄土宗が多い。これらは、近世初頭に整備された安土の浄厳院の本末圏を形成した寺院群と思はれる。全体からいって、湖東のうち、「中部地域」は、浄土系寺院の多い地帯であるといえよう。往古、この地域は、比叡山の勢力圏にあったといわれ、近江八幡市・安土町には天台系統の寺院が多い。禅宗系では、永源町には本山永源寺があるほか、各地に臨済禅の寺院があり、ほぼ均等に分布している。曹洞禅の寺院は僅かである。それに対し、近世の黄檗宗寺院が比較的多いことが注目

される。真言・日蓮宗系の寺院はきわめて少数である。ところで、宗派の歴史地理的な展開をものがたって、同質的な分布を示すところとしては、近江八幡市・安土町・蒲生町があげられよう。

第二レベルの宗教についていえば、天理教の教線が伸びている。とくに、天理教の盛んなのは、八日市・日野町・蒲生町の地域である。甲賀の水口は、県下でも天理教信者の多いところで有名であるが、以上の地域は、地理的にも水口方面に接続している。八日市市には、教会数は大教会2，分教会4を数える。日野町・蒲生町にも、大教会2，分教会7がある。近江八幡市・能登川町・五箇荘町といったところにも、分教会のいくつかがある。

キリスト教については、近江八幡市は、メンソレタームで有名なメレル・ボーリスの「近江兄弟社」があって、県下におけるキリスト教伝道の中心地の一つである。キリスト教信者は、大津市を除くと、滋賀県内で多いのは、近江八幡と湖西の高嶋である。近江八幡には、日基教団に属する教会4，日本イエス・キリスト教団1，日本ユナイト・ペンテコステ教団1を数え、韓国系教会もある。キリスト教のミッションの世界も新旧の競争が激しく、「中部広域圏」内にも、キリスト教の新宗教がかなり活動しているようである。八日市市には、伝統的な日基教団のほか、日本ユナイト・ペンテコステ教会、世界福音伝導教団の教会があり、五箇荘町（世界福音伝道）、安土町（日基）、能登川町（日基）

にもある。永源寺町や日野町には、新宗教のイエスの御霊教会教団の集会所があつて、若干の活動がみられる。近江八幡市・安土町（それに米原町にも）には、国策で造成された大干拓地があるが、そして、他県からも多くの入植者がいるが、そこで「神の幕屋グループ」というキリスト教無教会主義者が集会をもって活動している。

第三レベルの新宗教では、天理教・金光教について比較的に信者数があるのは、世界救世教・霊友会・御岳教・妙見宗などである（表3-111）。

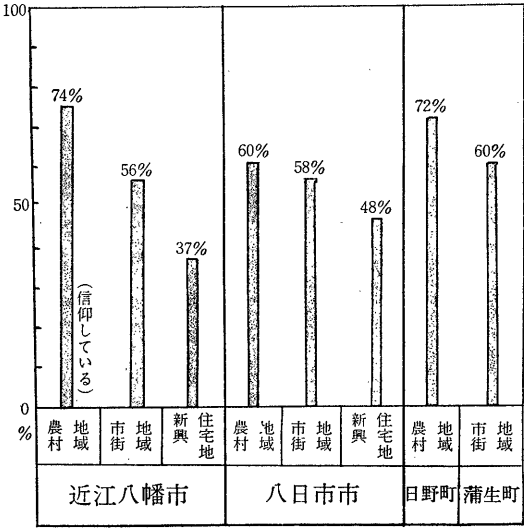
〔Ⅱ〕 今回調査にみられる宗教意識

さて、今回の調査の集計から、「中部広域」地域の宗教状況についてまとめてみると、「あなたは何か宗教を信仰しておられますか」(問25)という問について、調査対象地域トータルで、「信仰している」と答えた人は58%、「信仰していない」と答えた人は42%であった。これを性別に集計すると、男性では、「信仰している」が60%、「信仰していない」が39%となり、女性においては、前者57%、後42%という結果が得られた。さきに当地方が、全国有数の仏教信仰県であると述べたが、NHKの1978年の全国調査と比較してみても、宗教を信仰するひとの割合が、全国平均をはるかに上まわっていることが知られる⁸⁾。

表 3-111 滋賀県内の新宗教教会数
(関係分のみ)

	天理教	世界救世教	金光教	御岳教
近江八幡市	5	0	1	2
八日市市	6,(大)-2	0	0	0
蒲生郡	9,(大)-2	0	1	1
神崎郡	3	0	1	0
大津市	18	2	2	1
彦根市	4	3	2	0
長浜市	12	1	1	0
草津市	8	1	1	0
守山市	4	0	0	0
栗田郡	5	0	0	0
甲賀郡	22,(大)-2	0	1	0

図 3-1 地域別信仰率



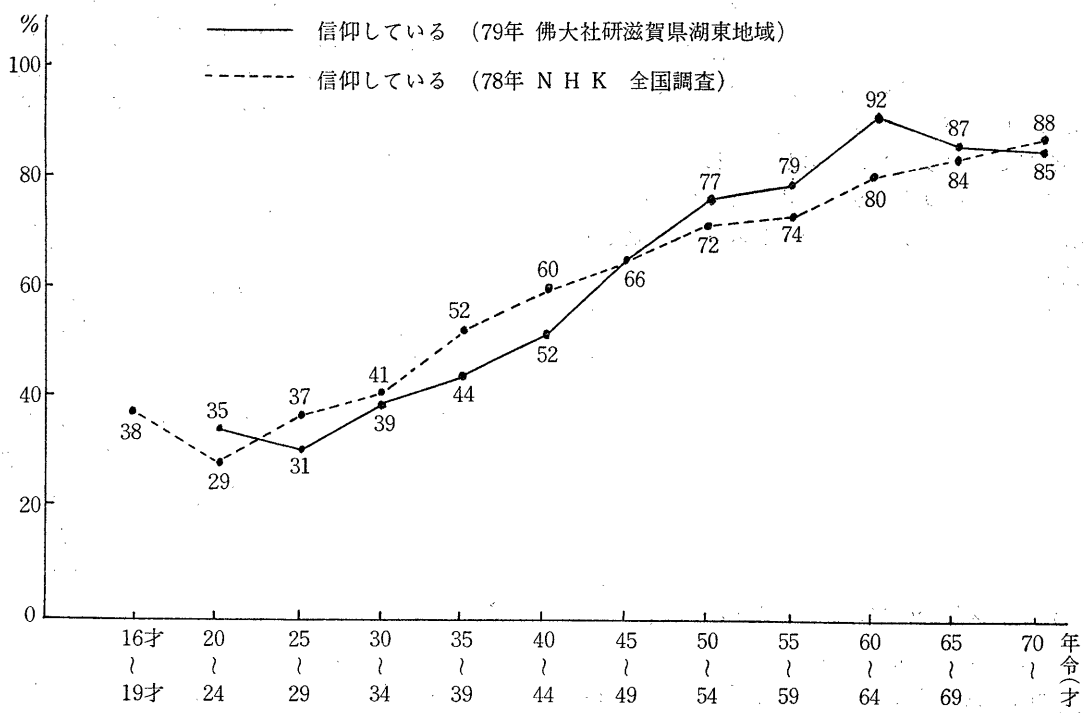
これを、調査対象地の地域的類型に分けてみると、図3-1のようになる。近江八幡市・八日市市・日野町・蒲生町の3対象地域を通じて、「宗教を信仰しているひと」と「宗教を信仰していないひと」の対比は、ほぼ同じである。しかし、各地区の地域的性格からいうと、共通した大きな特徴が見られる。宗教を信仰している人の数は、農村部においてやはり最高であり、ついで旧市街地域であり、いわゆる新興住宅地域では最低という数値が得られた。この点は、3対象地域を通じて見られる現象であり、やはり、農村部においては宗教にかかわる人が多く、逆に、新興団地などでは宗教に無関心の人が多いという当然な結果が得られた。

つぎに、宗教を信仰していると答えた人の年齢との相関をみてみると、これも年齢が上昇するとともに信仰する人が多くなるという数値が得られた。常識的にいっても、幼少年期は生まれ育った宗教的環境をそのまま受容しているが、一定の懐疑的時期を経てからは、年齢の上昇とともに神仏を信仰するというのが常態であろう。これをNHKの全国調査のカーブと今回の調査のカーブと比較してみたのが図3-2で

ある。つまり、年齢毎に信仰する人の割合は、いったん下がってから、漸次的に上昇するというカーブを画くのである。ただ、NHK調査では、もっとも宗教心のない世代が、20歳～24歳となっているが、今回の調査では、それが25歳～29歳間に見られた。しかし、これは大した意味をもたないであろう。しかし、今回の調査において興味あることは、「宗教を信仰している」人の割合は、60歳～64歳間が最高で、それより高齢者層となると、再び割合が下降するという結果がみられたことである。NHKの全国調査とちがったカーブを画くことになったが、これは何を意味するであろうか。今回の調査では、宗教を信仰する年齢階層は、60歳～70歳の間において最も高い割合であることがわかったのである。

さらに、宗教を信仰していると答えた人へのみ、その「信仰している宗教」について問うてみた(問26)。その宗教別に分類してみたのが、表3-112である。「中部広域」の地域では、やはり、仏教を信仰する人が圧倒的に多く、それも浄土真宗系17.5%、浄土宗15.7%となって、最も多い。ついで天台宗系5.5%、日蓮宗系5.4

図3-2 年齢別信仰率



%となる。この地域は、先述せるとおり、浄土真宗の伝統的地盤であって、ついで浄土宗信徒の多いことは、両宗派の寺院数からいっても当然な結果であろう。ただ、日蓮宗系信者が5.4%の割合であるが、それは旧来の日蓮宗寺院の信者であるというよりも、おそらく、その大半は、日蓮宗系新興宗教の信者であろう。このような人たちがとくに多いのは、日野町の旧市街地、近江八幡市の新興住宅地であった。キリスト教の信者数は、ごく僅かで、全体の1.2%にすぎない。

表3-112
信仰していると答えた人の宗教別とその割合

天 台 宗	43	5.5%
真 言 宗	7	0.9
曹 洞 宗	25	3.2
臨 済 宗	14	1.8
浄 土 宗	122	15.7
浄 土 真 宗	136	17.5
日 蓮 宗	42	5.4
天 理 教	5	0.6
大 本 教	1	0.1
カトリック	1	0.1
プロテスタント	9	1.1
そ の 他	48	6.1
不 明	2	

今回の調査対象地域には、県全体からいってキリスト教の教会数や信者数が多い地域がふくまれているが、全住民の宗教との対比でいえば割合はこのようなものなのかもしれない。プロテスタントの9人のうち、8人までが、近江八幡市在住であるが、八幡のキリスト教の宣教の伝統がうかがわれる。

また、この地域は天理教の比較的に盛んなどころという推定をもっていたが、今回の調査では、5人(0.6%)にすぎず、キリスト教の信者数よりも下廻る数値であった。

以上、調査地における、①信仰心の有無、②その年齢別分布、③その地域的分布、④その信仰する宗教別を見てきたが、さらに、今回の調査項目の中から宗教に関係あるものを抜き出したクロス集計の結果をまとめてみよう。

1 地域集団への加入

今回の調査では、いわゆる「氏子会」への参

加率が意外に低いことが知られた。これは、3調査地域を通じていえることであるが、氏子集団への加入割合は、旧市街地の方が農村部より高いという結果が出た。普通には、農村部の方が全区民参加のように思われるが、必ずしもそうでないようである(表3-113)。しかし、宗教団体への加入ということになると、やはり農村部において一番高い。氏子会あるいはお宮の祭典への参加は、当然なこととして農村部では意識されなかったのかもしれない。この地域集団の加入について非常に興味ある数値が見られたのは、近江八幡市の新興住宅地であった。この地域は宗教団体への加入率9.2%、氏子会への加入率0.9%と全地域の最低であり、しかも、町内会・自治会への加入率は全地域を通じて最高97.2%である。おそらくこの新興住宅地は、周囲の旧来の伝統的地域とは、比較的に独立して生活が営まれているのであろう。

2 学歴別宗教に対する態度

一般に学歴が高い方が宗教にかかわる割合が低くなると考えられるが、学歴調査(F5)と

表3-113 地域集団への加入 (%)

	八日市市			近江八幡市			日野 蒲生	
	市街	新興	農村	市街	新興	農村	市街	農村
町内会・自治会	91.8	94.0	85.4	91.3	97.2	83.8	91.1	91.1
氏 子 会	42.5	17.9	28.0	31.0	0.9	32.5	41.5	27.8
宗 教 団 体	15.1	17.9	25.6	12.7	9.2	33.3	26.8	30.4

表3-114 学歴別宗教に対する態度

	信仰している	信仰していない
小 学 卒	88.3%	11.7%
中 学 卒	61.5	38.5
高 校 卒	45.8	53.9
大 学 卒	43.6	56.4

宗教心の有無とのクロス集計の結果が表3-114である。今回の調査地域でも、トータルで小学卒では、88.3%の人が信仰心をもっているが、中学卒では、61.5%、高校卒では、45.8%となり、大学卒では43.6%と低下する傾向がみられた。

3 社会階層と宗教

社会階層別に宗教を信仰している人の割合を

表3-115 社会階層と宗教に対する態度

	経営者	商店主	名目 自営	単独 自営	農林 漁業	建設 職人	その他 の職人	使用人	家 内 労働者	販 売 サ ー ビ ス 業	工 場 労働者 (上)	工 場 労働者 (下)	その他 の生産 労働者	事務 労働者 (上)	事務 労働者 (下)
宗教を信仰している割合	73.3	57.3	72.9	68.8	90.6	50.0	60.9	52.2	35.7	46.7	46.7	58.0	57.1	38.3	53.9

みると、農村漁業者、経営者層、各種自営業者においては信仰心が高く、それに対し、販売サービス業とか事務労働者において宗教を信仰している人が比較的に少なくなるという傾向を示した。工場労働者と事務労働者を上下2段階に分けると、いずれも下級の階層に属する人の方が上級の人よりも信仰心があるという数字が出てくる(表3-115)。

4 居住期間と宗教

居住期間と宗教との関係をみると、長年同一地域に居住している人(20年以上)が最もサンプル数も多く、宗教を信仰している人も多いという当然な結果が得られた。1年未満や1～3年という比較的新しい居住者では、その率は低い(表3-116)。

表3-116 居住期間と宗教 (%)

	1年 未満	1～ 3年	3～ 5年	5～ 10年	10～ 20年	20年 以上
宗教を信仰している割合	33.3	48.3	36.3	36.0	38.1	69.2

5 家族形態別と宗教

家族形態別と宗教とのクロス集計では、今回のサンプル数にもよるが、あまり明白な数字が出て来なかった。二世代あるいは三世代同居と

いう家族において、宗教をもっている割合が比較的高いことは指摘できよう(表3-117)。

6 ライフ・ステージと宗教

ライフ・ステージと宗教との関係でいえば、これは明白に、ライフ・ステージが上昇するにつれ、宗教を信仰する人の割合が高くなってゆく。先にみた年齢別の上昇カーブと同様な数値の上昇がみられる。末子が独立して、老夫婦のみあるいは子供夫婦と同居というステージでは、宗教信仰率は80～88%に達するのである(表3-118)。

7 所得階層と宗教

所得階層と宗教との相関関係をいうと、100万未満の低所得層で宗教を信仰する割合が最も高く、74.4%であり、500～700万円、700万円以上という高所得層では、その比率は約50%であった。しかし、その中間の所得段階の区分によっては信仰心の有無を論じることではできなかった。それは、あまり意味のないことであろう。(藤山照英)

〔註〕

- 1) NHK放送世論調査所「全国県民意識調査」昭和54年1月。
- 2) NHKブックス「現代日本人の意識構造」。

表3-117 家族形態と宗教

	単 独	夫 婦	その他 の一世代	夫 婦 と 未 婚 子	片 親 と 未 婚 子	その他 の二世代	親 夫 婦 ・ 子 夫 婦 と 未 婚 子	その他 の三世代	非 親 族
宗教を信仰している割合	65.2	67.3	0	45.8	60.6	72.7	63.5	69.3	100

表3-118 ライフ・ステージと宗教

	同居して いる学生	学 生	独身・ 親同居	40歳未満 (夫婦のみ)	第一子 就学以前	第一子 義務教育	第一子 高等教育	第一子 学業終了	末子独立	夫婦のみ (40歳～ 65歳)	子供夫婦 と同居
宗教を信仰している割合	16.7	0	41.7	47.3	30.5	41.7	66.7	72.6	81.5	76.3	87.5